

川崎市多摩川河口域におけるクモガタテントウ

高 桑 正 敏・中 村 一 恵

Masatoshi TAKAKUWA and Kazue NAKAMURA: Note on a Coccinellid *Psyllobora vigintimaculata* (Coleoptera) Occurred near Estuary of Tama River in Kawasaki, Japan

クモガタテントウ *Psyllobora vigintimaculata* SAY は体長 2.0-2.7 mm ほどの小型のテントウムシ科甲虫の 1 種であり、元来は北アメリカに分布する。日本では 1984 年 6 月に東京都大田区の大井埠頭埋立地で発見されたのが最初であり、同年 11 月には同じく大田区の西六郷の多摩川河原でも採集されるに至った。また、本種はキク科の帰化植物であるセイタカアワダチソウに寄生するカビの 1 種、白渋病菌を食餌としていることも明らかにされた(窪木・和泉, 1985)。双方の場所とも多数の個体が得られており、この時点ですでに日本に帰化していたと見なすべきである。

その本種の日本での第 2 の記録は、松原 (1986) によって神奈川県からなされた。1986 年 9 月、川崎市川崎区殿町の多摩川河原敷で成虫・幼虫ともセイタカアワダチソウから採集されたことが報じられたのである。そのほかには、今のところこの食菌性テントウムシの日本での記録を見ないようである。

一方、筆者らは窪木・和泉(前述)の報告を見て、多摩川の神奈川県側にも本種が定着しているだろうことを確信し、1985年に川崎市川崎区の河川敷を調査したことがある。この時予想どおりにクモガタテントウを発見しているので、神奈川県におけるもっとも早い

採集例としてここに記録しておくことにした。

7 頭、川崎市川崎区大師橋付近の多摩川河川敷、22. VIII. 1985, 高桑・中村採集。

細かい地点のこととなるが、筆者らが本種を確認できたのは、図 2 に示すように大師橋下の河川敷だけであった。大師橋より上・下流方向にも大小のセイタカアワダチソウ群落が点在することから、下流方向へは 200-300m 先まで、また上流方向へは鈴木町までの約 1.5km の間の河川敷も捕虫網によるスィーピング調査を行なったが、クモガタテントウは 1 頭も得ることができなかった。ただし、白渋病菌がどの程度繁殖していたかは調べていない。また、1986年の確認者、松原豊氏にその時の詳しい確認地点と調査地点を照会した結果を図 3 に示す。

これら 2 つの調査結果からは、1985年も 1986年も本種の確認された地点がほとんど同じであることがわかる。大師橋の上流方向については 1986年のデータがないが、少なくとも下流方向へはこの 1 年間に分布を広げることがなかったらしい。

ところで、大田区側については窪木・和泉(前述)以降も調査が継続され、新たに東六郷や平和の森公園でも発見されるに至っている(未発表: 松原・和泉各

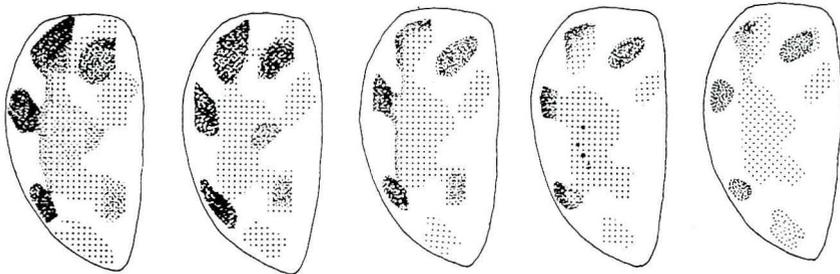


図 1 クモガタテントウの上翅(左)の斑紋変異(窪木・和泉, 1985)

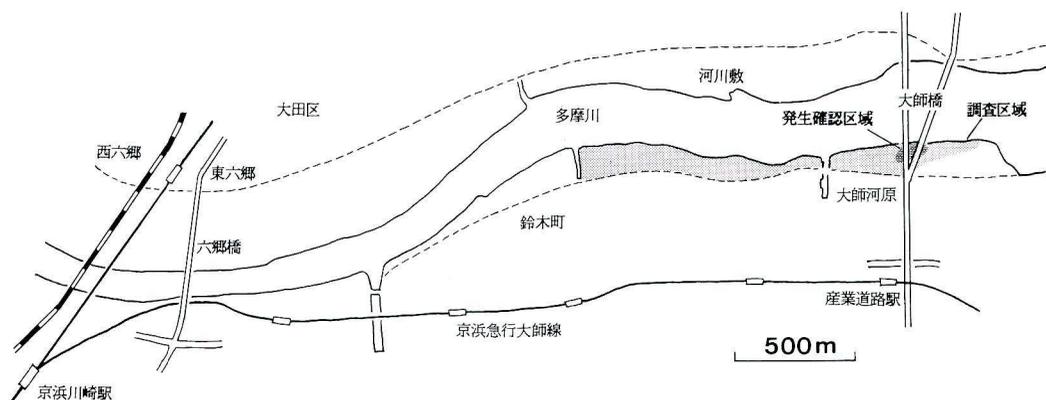


図2 1985年の高桑・中村による調査結果

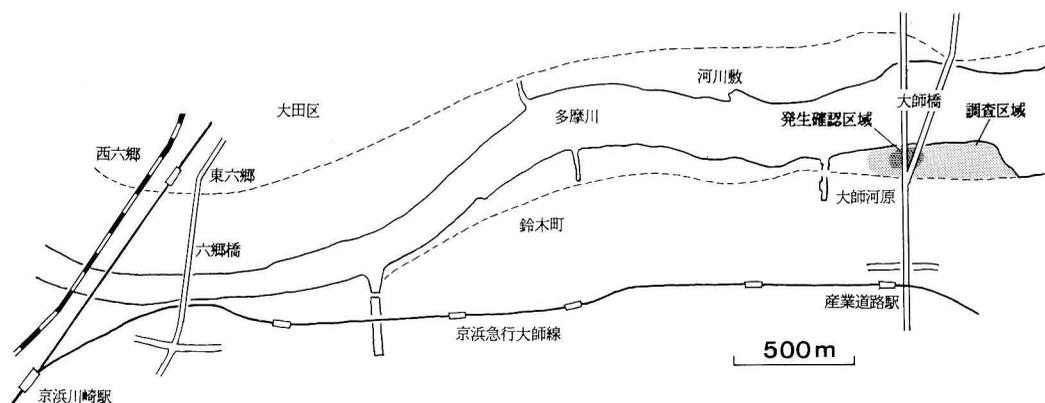


図3 1986年の松原氏による調査結果

氏からの私信)。本種が1985年以降に新たに分布を拡大したのかどうかは明らかではないが、現在の時点では潜在的にかなりの発生地点が存在するものと考えてもよいだろう。

これに対し、神奈川県側では前述したように、わずか1ヶ所しか発生地が知られていない。しかもごく狭い地域である。しかしそれはあくまで断片的な2回だけの調査の結果にすぎない。今後、大師橋周辺の調査を行なうことによって分布域の拡大の有無が明らかになれば、クモガタテントウが大師橋下に進出した時期の推定も可能となるだろう。同時に、セイトカアワダチソウ群落は臨海部や河川敷ばかりでなく、県内のいろいろな土地利用下に見られるので、こちらのほう

の調査も望まれる。

末尾ながら、クモガタテントウの生息状況等についてご教示をいただいた世田谷昆虫愛好会の松原豊氏と神奈川県昆虫談話会の和泉敦夫氏に厚くお礼を申し上げます。

文 献

- 窪木幹夫・和泉敦夫, 1985. 日本初記録の *Psyllobora* 属のテントウムシ. 甲虫ニュース, (67/68): 11.
- 松原 豊, 1986. 神奈川県未記録のクモガタテントウを採集. 月刊むし, (190): 7-8.

(神奈川県立博物館)